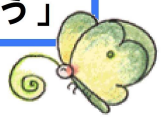
今月のことば

真の「自立」とは
「つながり」に気づくこと

今月はまず、今年（2006）６月に毎日新聞に載ったグラフィックデザイナーの牧口一二氏の記事からご紹介します。氏は、一歳の時に小児麻痺にかかり、それ以来足が不自由になりました。

「日本の障害者運動が掴み取った『自立』観は、まさに金字塔だと思う。それは、『苦手なことは人の力を借りていい。人と人とのつながりを豊かにしていこう』というもの。
健常な人の方が、全てを自分で背負う『自己責任』という名の下で、皆が孤立していくゆがんだ『自立』観に縛られているのではと思う」



この記事について、静岡大学教授の山下秀智先生が『在家仏教』に次のような寄稿をされています。

真の『自立』とは、牧口氏の言うような「つながり」を自覚することを言うのではないか。
ところが、なかなか人はこれに気づかない。
特に体も頑健で、意志も強く、思考力も勝れた人は、「私は誰の世話にもならず生きていける」と自信満々である。
しかし、私たちの思いのままには何事も展開しないし、当てにするようには何事も動かない。それは、逃れられない死や苦悩、争いや責めに出逢うことで、初めて自覚できる。

釈尊も苦行の果てに、瀕死の状態の中で、ありありと自らを生かしている**「宇宙的ないのち」とのつながり**に目覚められた。
「仏教とは何か」を知るには、難しい本を何冊も読むより、自らの生活の中でこのことに深く気づくことが大切ではないか。

真光寺